

空



2016・8・9

SORA 68号

東京 山田 正子

ハンカチを小さくたたみ初対面
彼の世から此の世の夜明け螢籠
盆用意いつしか二人になりけり
挽ぎたての草の匂ひのトマトかな
かぶり付くトマトに残る陽の余熱

福岡 西住 三恵子

禅寺のさざ波石や夏旺ん
花海桐両肩に振る禊ぎ砂
青葉潮参道高き志賀の宮
炎昼や角の混み合ふ鹿角堂
少年へ球を返して草取女

兵庫 岩井 京子

しらじらと梅雨に入りけり雀濡れ
梅雨茸の踏まるまでの白清し
いつの間にくつも庭に蟬の殻
幾種もの揚羽蝶来る庭となり
うちの子の様な顔して亀居りぬ

北海道 押田 裕見子

清流の堰にあらがふ花の塵
金色の日の輪に眩む揚雲雀
涼し気に結へる力士の大銀杏
かたつむり五欲を捨つるかに進む
もう誰も棲まざる生家屋根灼くる

大阪 井上 和子

天平の法灯揺るほととぎす
光背の千体仏や蝶の昼
三伏や閑伽井の水の濁りたる
巡拝のはじめ萌黄の麻衣
六月や島影に沼騒々と

福岡 吉村 摂護

鼻赤くそめて帰りし磯遊び
清貧の父の風鈴吊しけり
噴水に押し上げられし織月かな
亡き母の愛用の莫蔭梅を干す
逃げ水を追うて屋島に攻め入りし

北九州 横田 敬子

絢台と物差し指貫昭和の日
植田にも明かりの灯る夕べかな
薔薇垣をくぐればりハビリ診療所
雲の峰少年はもう振り向かず
片隅で大きくなりし余り苗

兵庫 石川 叔子

秀逸と書かれし実梅香をひろぐ
くれなゐを濃く糠雨の花柘榴
晴れをんな五人集まり五月晴
異国語の溢るる街の薄暑かな
境内の奥の小流れ濃紫陽花

兵庫 森 俊 人

幼児のまたたくたびに夏燕
梅花藻や忘れぬしこと浮かび出で
櫛の花星近づきて匂ふなり
老犬の浅き眠りや半夏雨
緊急の手術同意書夏の星

兵庫 青 木 朋 子

ほうたるの 一つは山家より去らず
闇を来て闇に消えたり螢川
わが胸を長く灯して初螢
星恋の高みへのぼりゆく螢
田面に螢火明滅峽の星

東京 遠 山 の り 子

明易し心懸りのあればなほ
七変化古都鎌倉に詣づれば
八方に根を張る大樹木下闇
黒雲に声のくぐもる鴉の子
山寺をつつむ静寂夏落葉

東京 古 川 夏 子

萬緑の谷を起点に町開く
柗の青実の堅きケアハウス
足入れて粗大な小指箱眼鏡
文庫本伏せし形に揚羽蝶
星月夜天文台下駐在所

空作品抄
柴田佐知子抽出

うすものの着られて人の形なす

遠泳ののつぺらぼうに上りくる

寺ぢゆうの柱に蟬の鳴くやうな

龍天に地に産声の両拳

炎天や井戸を祓ひて家を閉づ

甚平着ていよよ世間の遠くなる

古傷の頭となりし羽抜鶏

齡よりも若き声出てさくらんぼ

柔道着干して砦のごと真夏

深川 淑枝

岸 洋子

戸栗 末廣

角野 良生

山内 碧

森田 明成

石橋 幾代

中田 みなみ

曾根 富久恵



日々にひと通へば紫雲英道となり

遠く来て髪濡るるほど銀河の尾

馬は跳ね波は踊りて飾り山笠

万緑や笹は四方を憚らず

神棚をたたみて終る山開き

女人高野の落し文なら拾ふ

笑ひ声漏れくる路地や夏の宵

紫蘇もんで母に近づく思ひあり

何もかも許す扇を開きけり

青葉木菟百年そこにゐるごとし

歌舞伎見し顔をそのまま月の街

荒行は空の半ばやほととぎす

だんだんと悪相になる種茄子

織田高暢

原友子

高倉和子

田岡千章

松田明子

永淵恵子

矢野百合子

大西のり子

山本則男

河原敬子

田代貞香

吉田 稗

柴田志津子

蟬の殻匏屑ごと掃かれたる

亡き父は釣りしてをらむ夫の川

濡れ縁や父みし頃の真桑瓜

梵鐘は処を変へず青嵐

敗軍の将は逆さま飾り山笠

ひまはりを包んでゐたる笑ひ声

折鶴のどこも鋭角星祭

よく食べて後は寝てゐる帰省の子

大仰に手を差し出され踊の輪

新茶汲む今は佛の父母へ

縁たたき目高あつめて餌を撒く

はたた神いつもは見えぬ物照らす

キッチンに主婦の椅子ありトマトあり

秋 千晴

岩下きぬ代

宮井知英

西住三恵子

栗原京子

田坂能雄

田代民子

小林朱夏

あさなが捷

吉村撰護

白水良子

山田正子

古川夏子



葉隠れの祠を過ぐる油照り

夫婦して食後の葉夏浅し

ラベンダー斜め大地の斜めかな

かき氷嬰抱く妻へ含まする

肩車子が鳴らしたる貝風鈴

夜濯ぎの間に溜息の二つ三つ

ふるさとと決め白南風の心地好し

几帳面な母よ時の日に逝きし

土砂降りのあとの青空凌霄花

夜の秋重み増す胎横たふる

形代のうち重なりて沈みけり

雲の峰太古へ話さかのぼり

諸神の揃ひてをりぬ御田祭

井上和子

苑 実 耶

三井所美智子

田中とし江

林 徹 也

仲里奈央

荻 悠 子

窪みち子

横田敬子

えとう樹里

岡村尚子

遠山のり子

小島翠波

風鈴を百の音色の中を買ふ

天谷翔子

空つばの胸にしだるる夏柳

押田裕見子

法華寺の紅さすほとけ半夏雨

桐山 甫

人間になれよと猫に寝莫座敷く

青木朋子

白芙蓉母見送りし日のごとく

野畑さゆり

ネモフィラの漣の丘夏はじまる

清水量子

ひまはりの迷路に沈み母を呼ぶ

立花 一枝

鳶の輪のなほも高みへ春祭

森 俊 人

朝顔の鉢抱へゆく路地長し

本多トミ

竜の眼の飛び出してをり夏の雲

田邊 豊子

螢の暗を待つ間の読経かな

村上典子

あきらめは最後の手だて茄子の花

田口萬智子

古傷を思ひ出にして薔薇の花

田中素直



草取りし軍手を一指づつ洗ふ

十葉は残して終はる庭手入

海猫なくや小樽運河の灯のゆれて

雨を待つ形にひらく花菖蒲

遠泳や三百六十度こどく

さとすと猫に語り花の昼

怠け癖つきし勉学梅雨晴間

負けるなよ前に出て来い燕の子

一画の茂り毒蛾に負けしより

朝顔の咲き揃ひたる鬼子母神

町内の建具屋消えし金魚屋も

ふじの茜

三輪敏夫

石川叔子

今井春生

わたなべ漣

片田理枝

日高孝

後藤園子

岩井京子

村上二三

森真二

空作品評

柴田佐知子

うすものの着られて人の形なす 深川 淑枝

うすものは絹や紗など、薄絹で作った単衣を言う。古くは「蟬の羽衣」と呼んだようである。へ羅に女の息のかよふらく、上村占魚へうすものの水輪の如き綾まとふ、赤松蕙子などは薄く涼やかな羅なればこそ作品。

掲句はへ着られて人の形なすという秀抜な措辞によつて、天の羽衣のような布の量感・質感が見事に把握されている。

遠泳ののつぺらぼうに上りくる 岸 洋子

海や湖などで長い距離を集団で泳ぎきる「遠泳」。補助員や救助用の船がつく。数キロ、あるいは数十キロ泳ぐのであるからその疲労は甚だしいものである。水より上がつてくるときは疲れ果てて魂さえどこかに置いてきたような様子なのかもしれない。へのつぺらぼうに上りくるよによつてその姿が見えてくる。思いがけない言葉の選択だ。

寺ちゆうの柱に蟬の鳴くやうな 戸栗 末廣

日盛りの木々にとまって命の限りを尽くして鳴きだてる蟬。作者は本堂に座っているのかもしれない。へ寺ちゆうの柱が面白い。突つ立っているものなら何にでもとまって蟬が鳴きたてているのではないかと思えるほどの湧き立つような蟬時雨が聞こえてくる作品。

馬は跳ね波は踊りて飾り山笠 高倉 和子
敗軍の将は逆さま飾り山笠 栗原 京子

博多の夏祭、祇園山笠の飾り山笠の描写。七月一日に博多人形師の手になる十数メートルの飾り山笠が町の方々に立つ。

一句目は武者が荒々しく見得を切っているであろう。紺の波が立ち上り、見上げると武者を乗せた馬が宙を駆けているのだ。へ馬は跳ねへ波は踊りてと畳みかけてくるリズムによつて、人形師が腕を競う飾り山笠の勢いが伝わってくる。

二句目も鮮やかだ。勝利した武者人形は絢爛たる武器を身に付け大きく飾られていることと思う。敗れた

将はその下方に頭から落下するような姿で据えられて
いるのだ。勝敗の分かれ目を鮮やかに描き出した飾り
山笠を、敗者だけをクローズアップした〈逆さま〉の
一語によって勇壮に詠みあげている。

神棚をたたみて終る山開き

松田 明子

神棚は折り畳み式だったのだ。確かに海開きも山開
きも神棚をしつらえ、行事が終われば持ち帰るのだから
納得。方々に足を運び緩みの無い作品を作り続けられ
る明子さんならではの作品。山開きが始まる前から
終わったあとまでしっかりと見届けたことが分かる。
このように一箇所を据えて、じつくりと見尽くす
時間も大切にしたい。

紫蘇もんで母に近づく思ひあり

大西のり子

母上も作者と同じように毎年梅を漬けておられたの
だろう。漬けこむ赤紫蘇を揉んでいると、母もこのよ
うにやっていたなあと母の姿が目に見えかんでくるの
だ。この句の眼目は〈近づく思ひあり〉だ。何かにつ
けて母を思い出すという句は多く詠まれているが、〈近
づく思ひ〉との措辞は秀抜だ。大西のり子さんは今号

が初投句。

青葉木菟百年そこにゐるごとし

河原 敬子

初夏の瑞々しい闇にホーホーと鳴く青葉木菟。日本
の昔話のような遙かな懐かしさを覚える澄んだ声だ。
〈百年そこにゐるごとし〉の比喻に共鳴する。

その他取り上げたい佳句が多かった。その中より。

甚平着ていよよ世間の遠くなる
森田 明成
齢よりも若き声出てさくらんぼ
中田みなみ
柔道着干して砦のごと真夏
曾根富久恵
万緑や笹は四方を憚らず
田岡 千章
歌舞伎見し顔をそのまま月の街
田代 貞香
梵鐘は処を変へず青嵐
西住三恵子
ひまわりを包んでゐたる笑ひ声
田坂 能雄
夜の秋重み増す胎横たふる
えとう樹里
雲の峰太古へ話さかのぼり
遠山のり子
諸神の揃ひてをりぬ御田祭
小島 翠波
空つぼの胸にしだるる夏柳
押田裕見子
人間になれよと猫に寝莫塵敷く
青木 朋子
古傷を思ひ出して薔薇の花
田中 素直
遠泳や三百六十度こどく
わたなべ漣

空集

柴田佐知子選



照らし合ふたび螢火の瘦せてゆく 福岡 岸 洋子

田を植ゑてふるさとの風若返る

夏柑売りずり落ちさうに子を背負ひ

キャンプの火汐木を膝で二つ折り

遠泳ののつぺらぼうに上りくる

こゑを出すことさへ暑き日なりけり

健康寿命まだまだまだと胡瓜揉む

果樹園の中の木の家明易し 兵庫 戸栗 末廣

聖五月翅あるものはひるがへり

いつたんは縮みてすすむ蚯蚓かな

水くらげ溺れてゐるのかも知れず

寺ぢゆうの柱に蝉の鳴くやうな

蚊喰鳥闇喰ひ散らし喰ひ散らし

山板魚そこに百年ゐることし

妻いつも何か煮てゐる日永かな 福岡 角野 良生

三鬼忌の紅茶に落とすナポレオン

残り鴨いささか燥ぎ過ぎないか

水口に堰板入るる桐の花

日の暮の一濤高き植田かな

鍬負うて蛇の死跨ぐ畑帰り

火の星の大きく涼し地震のあと

汲み置きの水しんとあり青葉木菟

影大き鳥のよぎりぬ更衣

うすものの着られて人の形なす

北九州

深川淑枝